KIZUNA

きずな

No. 160
2022.9.1

日本カトリック海外宣教者を支援する会

巻頭言

40日、40夜、そして40年

フランシスコ会　村　上　芳　隆 ofm

久しぶりに司祭叙階式に与りました。毎年開かれるフランシスコ会の東アジア管区長協議会の集まりが、８月１日から５日まで、フィリピンで開催され、その初日が叙階式でした。マニラの管区本部修道院の隣には、バジリカ聖ペドロ・バウチスタ教会があります。叙階式はこの教会で行われました。保護聖人である聖ペドロ・バウチスタは、26聖殉教者のフランシスコ会士のリーダーです。彼はスペインからフィリピンに派遣され、さらに日本へのスペイン王大使として秀吉のもとに派遣され、そのまま宣教者として残りました。

叙階式では叙階の按手の前に荘厳な連願の祈りがあります。受戒者たちは床にひれ伏し、聖歌隊が先唱して祈ります。司式した大司教は説教の時、その祈り方に触れて受戒者に話しかけました。大司教が強調したのは、「地にひれ伏す者」としての心構えでした。人間は「地」の塵から創造された弱い存在であること、ひれ伏した姿は「架け橋」であり、人々をキリストにつなぐ存在であること。「架け橋」は人に踏まれ、多くの人がその上を通ってキリストのもとに行く時に存在意義があること、などでした。

満員の大聖堂でこの説教を聞きながら、わたしの心は引き締まってきました。というのも

もくじ

巻頭言 …… 1
第85回運営委員会議事録 …… 2
宣教者からのお便り …… 7
こんにちは！お久しぶりです!! …… 13
ザ・メッセージ・ＥＣＨＯ …… 14
創立40周年記念 …… 16
連載「海外宣教」 …… 22
新入会員・事務局より …… 24

2022 年はわたしが司祭叙階されて、ちょうど 40 年になる年である事を思い出したからです。久しぶりに叙階式に参列した日、わたしが初心に帰ることが出来るように気付きと促しを、神様は与えてくださったのです。とてもありがたいことです。

今年は「日本カトリック海外宣教者を支援する会」が設立されて 40 年になります。ご存知のように「40」という数字は、聖書では特別な意味があります。ノアの箱舟のエピソードでは「40 日 40 夜」雨が降り続いて……、出エジプト記ではエジプトから解放されて約束の地に入ったのは「40 年」後でした。また、イエスは宣教生活に入る前に「40 日間」荒野で断食しながら祈りの時を過ごされました。

40 年というのは世代がすっかり交代する期間です。また、孔子によれば「四十にして惑わず」というように、人が成熟するのに必要な年月でもあります。そして、40 日の断食ののち、イエスは神の国を宣言する「新しい」生活を始めました。

40 年の経験を振り返る時、わたしたちは、個人、団体、組織にとって新しい在り方、新しい方法について再考する機会を得ます。歴史を振り返り、わたしたちの使命（ミッション：存在理由）を再確認しながら新たな一歩を踏み出していきたいものです。

□■□ 第 85 回運営委員会議事録 □■□

日　時：2022 年 6 月 11 日（土）　15:00 ～ 16:15

場　所：ズーム会議　参加：運営委員 12 名

議　事

Ⅰ．2021 年度活動報告：すべて承認された。

会　議　運営委員会開催 ‘21 年 6 月 12 日、9 月 11 日、12 月 11 日、‘22 年 3 月 12 日 zoom にて

諸活動

1）広報活動

a. 宣教地からのレポートと国内会員の声などを掲載した広報誌「きずな」を年 4 回（6、9、12、3 月）発行し、国内会員と海外で働く宣教者に送付し相互の交流と宣教者の現地活動を、日本の多くの人に伝えた。ホームページも定期的に更新。会員外にも広く活動を告知できた。

b. 海外宣教者のお話を聞く会

10 月 9 日当会山野内倫昭司教の zoom による「お話会」を開催。

c. カトリック新聞に会の情報を掲載、新入会員を得ることができた。

2）援助活動

世界各地のコロナ禍によりめっきり援助申請は減ってしまった。事務局を尋ねる宣教者も殆どおられなかった。

3）宣教者への支援活動

「きずな」は季刊で世界 140 ヶ所以上、寄付された雑誌や、カトリック新聞等を世界各地

に毎月あるいは２か月に一度遠方 50 ヶ所に送付。クリスマスカードも一言添えて全員にお送りした。しかしながら世界的コロナ禍で、いたるところ郵便事情がいつもと違うために戻ってきたり現地に遅れて到着したりした。このような時であるからこそ直接受け取ることで読みやすく外に出られない今、楽しみだとの感想も多かった。

4）その他

・コロナ禍で宣教者の「事務局訪問」は宣教者と直接お会いすることはできなかったが電話やメールによる報告等で現地を知ることが出来た。また直接送られている会報「きずな」により他の宣教者の様子を知り、宣教地での交流も生まれ、さらには事務局、会員と繋がることが出来た。宣教者から写真や原稿をたくさん頂いた。

・今年はコロナ禍で直接どちらかの教会にお邪魔することが無かったため、会員の皆様との交流はほとんどできなかったが、エコーでお伝えした一言が多く寄せられた。

新入会員　26 名（個人会員）　入金件数 659 件（個人、修道会、教区、教育関係他）

Ⅱ．2021 年度決算報告：すべて承認された。

2021 年度 会計決算

(1)入金の部　　2022年3月31日

海外宣教者を支援する会　　（金額単位：円）

項　目	2021年度予算額	2021年度決算額	摘　要
会費寄付金入金	10,000,000	9,185,343	現金、振替口座、銀行振り込み合計
基金取崩し	0	0	
雑収入	0	0	
預け金利子	0	65	銀行利息
前年度剰余金	9,116,802	9,116,802	
合計	19,116,802	18,302,210	

(2)出金の部

（金額単位：円）

項目		2021年度予算額	2021年度決算額	摘要
援助費		8,000,000	1,978,989	コロナ禍活動減で申請が減った
研修費		50,000	50,000	10月山野内倫明司教リモートお話会開催
基金繰入				
運営経費	広報	1,060,000	1,131,140	会報誌きずなカラー作成、カトリック新聞広告料
	印刷費	290,000	316,480	封筒、宛名印刷、コピー機リース代など
	通信費	1,450,000	1,395,308	「きずな」国内発送費、電話代など
	事務用品費	10,000	15,860	コピー用紙、ファイル、ゴム印作成
	維持管理費	1,550,000	1,617,543	事務所維持費、1人分給料他、パソコン保守、サーバードメイン料など
	支払手数料	190,000	156,153	寄付振込手数料、送金手数料など
	交通費	140,000	111,560	発送ボランティア中止、事務年間交通費、事務ボランテイア交通費
	会議費	20,000	22,110	会議のためのズーム費用
	雑費	50,000	44,405	お歳暮、インターネットダウンの修理他

	備　　品	12,000	34,532	掃除機購入、.シュレッダー故障1台、事務所座布団購入
	予　備　費	0	0	
	小　　計	4,772,000	4,845,091	
当期支出合計		12,822,000	6,874,080	
次期剰余金		6,294,802	11,428,130	
合計		19,116,802	18,302,210	

2021年度 援助費

2022年3月31日現在

	国	申請者/申請内容	申請額（送金額）
1	東ティモール（ダレ）	Sr.中村葉子（聖心侍女修道会）の紹介でダレに拠点を置くISMAIK Sr.マナル―のプロジェクト４歳から就学年齢までの子どもの為の幼稚園建設（２教室、１教員室）対象は子ども４０人。親が貧しく授業料を払えない為。建築資材、家具、教材、運営管理費、教員二人の半年分給料（今回限り）。	＄7,140（￥805,325）
2	チャド（ライ）	Sr.泉叔美（ショファイユの幼きイエズス修道会）マンゴの木陰を利用して学校に行っていない子どもの識字教室継続のため。同時に栄養補充の支援も含まれている。公立の学校がお休みになると対象者は増えてしまう。１年間分	€1,700（￥220,000）
3	メキシコ（ウイチャパン）	Sr.眞神シゲ（ベリス・メルセス宣教修道女会）より難民支援のため、メキシコの難民非難所の一つウイチャパンへの援助年間１０万円、主に交通費。医師、イエズス会師、メルセス会員、二人のボランティアの５人組が難民の為に２４時間奉仕を続けている。難民は南米数か国よりメキシコを通ってアメリカを目指し歩み続けている。彼らのためにこの５人組達が医、食、住と医療を提供するため	¥100,000
4	グアテマラ（グアテマラ）	Sr.眞神シゲ（ベリス・メルセス宣教修道女会）ゴミ捨て場（崖下）に住む人々の救済、仕事のない女性救済(工場で働いて現金収入を得る)等、 同時にゴミ捨て場に住む人々に安く食料を供給するための援助金。材料費、大豆、トウモロコシ、小麦粉他。働く人々１０人分への食費、一人分５０円を含む１０万円。	¥100,000
5	チャド①（ライ）	Sr.有薗順子（ショファイユの幼きイエズス修道会）より、「村人の識字教育のため」€314.8の申請があった。黒板2ｘ6か所分、ノート、チョーク等の備品代、先生の研修費年2回、12人分（今回限り）、先生への謝礼12人分（今回限り）。合計480,000F	-
6	チャド①（ライ）	Sr.有薗順子（ショファイユの幼きイエズス修道会）より、「女性徒のアトリエ支援」€180.3の申請があった。毛糸代、布地代、刺繍糸やファスナー、先生の謝礼（今回限り）合計275,000F	€495.1（2件合計¥65,000）
7	チャド②（ライ）	Sr.有薗順子（ショファイユの幼きイエズス修道会）より、「村人の識字教育のため」前回と同じ目的で実は€314.8は→€732.32の換算間違い差額€417.52の再援助。	-
8	チャド②（ライ）	Sr.有薗順子（ショファイユの幼きイエズス修道会）より、「女性徒のアトリエ支援」前回と同じ目的で実は€180.3は→€419.8の換算間違いで差額€239.5の再援助。	€657.02（2件合計¥90,000）
9	メキシコ（チアパス）	Sr.眞神シゲ（ベリス・メルセス宣教修道女会）から今回はメキシコの難民に対する活動。ソヤティタンの共同体を訪問するために車を使用するが、そのガソリン代が上がってしまった。それでガソリン代を急遽申請したい。	＄1000.00（￥100,000）
10	国内	「カトリック新聞」、「こじか」「カトリック生活」などのカトリック雑誌送付，「きずな」、「クリスマスカード」「海外宣教者名簿」などを宣教者のために作成、送付。名簿のみ送付は次年度送り。	¥536,064
	合計		¥2,016,389

１＄＝114.69　１€＝￥129～132.47

2021年度 貸借対照表

2022年3月31日現在
（金銭単位　円）

郵便局振替貯金	198,162	期末剰余金	9,116,802
みずほ銀行高田馬場支店	8,860,497		
現金(円)	58,143		
合計	9,116,802	合計	9,116,802

（＄現金を190.00保有）

援助基金内訳

金融機関名	金額単位（円）	金額単位（$）
ゆうちょ銀行	9,797,858	
三菱東京UFJ銀行	4,326,860	
みずほ銀行（ 外貨＄預金）	380,986	3,441.61
合計	14,505,704	3,441.61

援助基金推移詳細

ゆうちょ銀行	前年度繰り越し	9,797,816	
	利息	42	
	小計	9,797,858	
三菱UFJ銀行	前年度繰り越し	4,326,823	
	寄付	0	
	利息	37	
	経常勘定へ	0	
	小計	4,326,860	
みずほ銀行外貨＄預金	前年度繰り越し	380,875	3,440.61
	出金	0	0.00
	利息	111	1.00
	小計	380,986	3,441.61
合計		14,505,704	

＊$＝110.70

2021 年度 会計監査報告

2021 年度の会計監査を監査したところ適正であることを認ました。

2022 年 5 月 13 日

監査役　桐 野　香

Ⅲ．2022 年度活動計画・予算審議：すべて承認された。

会　議　運営委員会　年４回開催（6 月、 9 月、12 月、2023 年 3 月）
リモートで行い年１回程度集合する。

諸活動

１．広報他　○「きずな」年４回発行　3,000 部
○ ホームページの運営による広報活動
○ カトリック新聞に広告掲載
○ いくつかの教会に「きずな」を置かせていただく

２．援　助　○ 援助申請があれば運営委員会で申請プロジェクトを審議の上、実施
○ 最新 2021 年度版海外宣教者名簿送付
○ カトリック雑誌やカトリック新聞などを送付
○「きずな」を送付

3．講演会・勉強会

○ コロナ禍の様子を見て「宣教者のお話を聞く会」開催、あるいはリモートにて開催する予定

4．その他　○ 可能であれば帰国・一時帰国された宣教者とのコンタクト、電話、メールでインタビューを行う。可能になれば事務所にお越し頂く

○ 会の PR を兼ねて参加できる場所を模索（今年は未定）

○ クリスマスカードを作成、一言を添えて宣教者全員に送付

2022 年度 会計予算表

(1)入金の部

（金額単位： 円）

項目	2021年度決算額	2022年度予算額	摘要
会費寄付金入金	9,187,448	9,500,000	
基金取崩し	0	0	
雑収入	0	0	
預け金利子	65	0	
前年度剰余金	9,116,802	11,430,235	
合計	18,304,315	20,930,235	

(2)出金の部

（金額単位： 円）

項目		2021年度決算額	2022年度予算額	摘要
援助費		1,978,989	8,000,000	昨年はコロナで申請が少なかったので、活動が始まった時昨年度分も置いておく
研修費		50,000	50,000	本年もお話会を予定
基金繰入		0	0	
運営経費	広報	1,131,140	1,200,000	「きずな」年4回発行・カトリック新聞広告費他
	印刷費	316,480	320,000	封筒・宛名印刷・コピー
	通信費	1,395,308	1,450,000	「きずな」・雑誌、国内外送料・電話・郵便
	事務用品費	15,860	16,000	ラベル・コピー用紙他
	維持管理費	1,617,543	1,620,000	事務所維持費（含人件費1名分）
	支払手数料	156,153	160,000	振込・送金手数料
	交通費	111,560	130,000	事務所1名、事務ボランテイア、運営委員交通費
	会議費	22,110	30,000	会議のためのズーム費用
	雑費	44,405	50,000	弔慰金・謝礼他
	備品	34,532	12,000	
	予備費	0	0	
	小計	4,845,091	4,988,000	
当期支出合計		6,874,080	13,038,000	
次期剰余金		11,430,235	7,892,235	
合計		18,304,315	20,930,235	

Ⅳ. 「きずな」159 号について

編集者から→カラーの冊子は評判が良いので費用はかかるが今後も続けたい。カラーにすると写真が綺麗に出るので現地の様子が伝わりやすい。

Ⅴ.「きずな」160 号について

・巻頭言→村上芳隆神父（フランシスコ会）当会会長

Ⅵ. 援助申請

今回も 5 月 31 日現在援助申請は到着していない、もう少し落ち着いて活動が始まってから送られて来ると思う。

Ⅶ. その他

・海外送金について様々話合った、これから海外でも活動が本格化して海外送金がある場合その他送金方法も探ってみる。（みずほ銀行六本木支店が海外送金から撤退したため）

・11 月に「宣教者のお話を聞く会」開催予定、日付、内容は未定

・5/17 事務局にてボランテイア 1 名で名簿発送すべての準備

・5/20 事務局から海外名簿 104 件・国内名簿 214 件発送

・5/24 事務局からボランテイア 1 名で海外雑誌 46 件・オリゾンテ 18 件発送

・6 /2 瀬田発送 2019 年より 2 年ぶりにボランテイア再開、9 名で 2,860 件発送

・6 /3 事務局からボランテイア 2 名で海外きずな 114 件・国内大口 7 件発送、大口教会分は後日発送予定

・運営委員会 9 月は（zoom）・12 月は集会の形で開催（1 年に 1 度は集合）
次回運営委員会 9 月 10 日（土）15 時～ （zoom）にて

宣教者からのお便り

ドイツ　◆デュッセルドルフ◆

エンマウスの弟子から学ぶ

聖パウロ女子修道会　比　護　キクエ

昨年,「苔むした大木からの芽」というテーマで寄稿させていただきましたが、今回はその続きのような感じで、最近私がエンマウスの弟子から頂いたお恵みを分かち合いたいと思います。

２年前ローマで修道会の総会があり、その後今から数か月前に、総長と総評議員のシスター方の公式訪問がありました。以前は、何かのテーマが上げられ「向こう 6 年間……の宣教に励む」という内容でした。でも今回は、「再創造」という点に重きが置かれました。世界、特にヨーロッパの教会と各修道会の現状を見ると、うなずけます。ほんの数十年前まで世界の各地に宣教者を派遣していたフランシスコ会でさえも、40 歳の神父様が昨年叙階されたのを最後に、新しい会員の入会が途絶えているとのこと。ヨーロッパでの私たちの修道会は、３年前にドイツで一人初誓願を立てた有期誓願者以外、どの国も何年も入会者がないということは、なにも不思議ではありません。

私の属する地方区では、この再創造をめざして「エンマウスの弟子を段階的に観察するよう」促されました。私は今まで，エンマウスの弟子

の物語は、復活の話しと決めつけ、それ以上深く考えたことがありませんでした。でも勧められるままに弟子たちの行動をいくつかの段階に分けてみましたら、思いのほか意義深く、それこそ目から鱗が落ちる思いがしました。私は聖書学者ではありませんので、これはあくまでも私の見解です。私が見た段階は、以下のとおりです。

１段階　弟子たちがイエズスと一緒に活動した時期
２段階　イエズスの十字架上での死
３段階　弟子たちが失望と将来への不安から離散する
４段階　エンマウスへの途上でのイエズスとの出会い
５段階　目が開き、エルザレムへ帰る
６段階　「主は復活された」「私たちは主を見た」という証言

この段階に沿って、教会や修道会の歴史、そして個人の生涯を比較してみましたら、多くの共通点があり、学ぶところが多くあるということに気が付きました。

１段階　この時期は、修道会が創立者と一緒に活躍した時期です。会員も若く活発で、未来に大きな夢と希望を抱いています。個人でいえば、30 代から 50 代の元気な時期です。

２段階　イエズスの十字架上での死。これは創立者の死にたとえともよいと思います。会員は、指導者を失ったことで、大いに落胆するでしょう。会員自身も老齢化したり、病気に見舞われ、自分の存在価値と将来への大きな不安に見舞われます。

３段階　ある会員は落胆し、修道会を去っていくかもしれません。エンマウスの弟子のように。

４段階　この苦しい時期、落胆しても，信仰と神への愛を持ち祈り続けます。そうすると、主は聖霊を送ってくださり、目が開きます。

５段階　目が開いた二人は、自分たちの置かれた立場が見え、初心に戻ります。修道会も、創立者の死によって落胆していたのが、祈りや聖霊によって本来のカリズマを知らされ、初心に戻ろうとします。

６段階　二人の弟子の使命は、活動から証しへと変わりました。イエズスと一緒にあちこちで病者を癒し、苦しむ人を慰め「神の国は近い」と告げていたのが、「主は生きておられる」「私たちは主を見た」と告げる，動から静への福音の宣教に変化しました。

私たち人間の一生も修道会の一生も、このエンマウスの弟子の使命の変化から、「主は現在の私、あるいは私たちにどの証し方法を望んでおられるのか」と考える必要があると思いました。若い時は、寝る暇も祈る時間もないほどに活躍していたでしょう。でも高齢や病気で祈る力も考える気力もなくなり、ただ主の前に「主よこれが今の私の全てです」と首を垂れるだけの状態になるかもしれません。

何十年か前に、生前管区長秘書をしてすべての姉妹に惜しみなく寛大に愛情を注いで奉仕してくださった方が癌になりました。その元気で活発だった方が、最後は病院のベットに横たわり、主のお迎えを待つばかりになった時、私の修練長だった方が見舞いに訪れました。その時の印象を、その方が私に手紙に書いて送ってく

ださったことを思い出します。「あんなに元気だった彼女が、話すことも身動きもできずにただじっとベットに横たわっている姿は、旧約聖書に出てくる、祭壇の上に置かれた牡牛のように見えました。＜主よ、私の全てをあなたの焼き尽くす生贄として捧げます＞と言っているようでした。」この手紙を読んだ時、私はとても感動し、「ああ、なんとこの姉妹は幸せな方か！」と思いました。そして臨終の姉妹をこのような目で見られる方を修練長としていただいたことを心から感謝しました。

私の生家には、樹齢 400 年以上で幹回りが約 5 メートルの菊桜という老木があります。普通の植物は，種や根、株から芽が出、繁殖します。でも生家のこの菊桜にはそれがないのです。その代り、不定根という無数の大小の若木が何十本となく張り付き、親木から生気をもらい生きているのです。帰国し，生家を訪れるたびに、この桜の木を見ると、自然の不思議さと神様の創造の素晴らしさに感嘆します。日本の教会も、270 年という、教会も修道会もなく司祭もいない苦難の長い禁教の期間を乗り越え、過ごしました。それでも主は恩寵を注ぎ、教会を導いてくださいました。これも私にとっては、神様の恩寵を考えさせてくれる一つです。

長い話しあいと熟慮の結果、今年の 12 月 31 日に私がいるデユッセルドルフの書院を、2023 年の 2 月には修道院を閉鎖することになりました。若い姉妹の中には、「まだ何か続ける手段があるのではないか？」と言う人ももいます。でも私たちの目的は修道会の存続ではなく、人々に「神には栄光を、地には平安を！」と告げることです。エンマウスの弟子が新しい使命のために勇気をもってエルザレムへ帰ったように、私たちも、私のエルザレムへ、私たちのベトレヘムへ帰る必要があります。それは負けでも後退でもなく、主が現在私にあるいは私たちに望まれる新しい宣教の形で、主の福音を告げる再出発のためです。前回のとき書きましたように、主が苔むした大木から必ず新しい新芽を出してくださることを固く信じています。

苔むした大木から新らしい新芽

チャド　◆ライ◆

困窮生活に苦しむ子供たち

シュファイユの幼きイエズス修道会　泉　淑　恵

チャドは雨期がはじまりました。茶色に枯れていた風景が一度に緑色にかわり、人々は耕し植え始めたところです。

2021 年と 2022 年のことを少し、報告させていただきます。ライの未就学児のための青空教室は。残念ながら頓挫したままです。教区の教育委員会の方は、正規の小学校にしたらいいといわれました。確かに小学校の数は足りていません。公立の小学校は 1 クラスに 80 人から 100 人いるとのことです。でも小学校にするためには、地元の保護者たちが動き始めなければ

ならないのですが、青空教室の保護者たちは子どもを学校に通わせる必要があると思ってはいないようです。勉強したくても昨年の授業料が未納で一番近い学校から退学させられた子どもが歩いて20分ほどの所にある隣の学校に通ったりしています。年に400円の授業料を負担することができないというのが本当のことなのか、真剣に考えないでその日暮らしでいるためにそうなっているのか事情はそれぞれだと思います。小学校を始めるだけの力は私にはありませんしましてや、この親御さんたちを説得する事はとても不可能です。私自身読み書きがこの子達に必要かどうか迷っているくらいです。本も新聞も雑誌も無く一生の間何かに字を書くチャンスがあるとは思えません。それよりも今お腹がすいているのですから、食べられるものを手にするのが優先でしょう。その点で彼らは今、毎日その実習、実践を積み重ねています。もう少し先へ進む手伝いができないかと私も模索中です。この子供たちがけがをしたり、病気をしたりしたときに何度か薬代や治療費を出してあげました。その際、看護師の方から保護者がいない（死亡、刑務所、入院中など）ために治療費を払えない子どもたちが多い事を聞かされました。あるいは、障害をもって生まれた子が必要な手術や、機能訓練を受けられないこともある、また未成年の未婚の親が経済力がなく子どもが栄養失調などなど……。貧しさが貧しさを生み複雑に絡んだ貧困の連鎖で最も苦しむのは最も弱い小さい存在です。青空教室が実質継続不可能なので、頂いた援助金をこの子どもたちの治療費、訓練費などに使わせて頂くことに致しました。勝手な事で申し訳ないのですが、子どもたちの亡くなることも多く特に小さい子は病気になった、亡くなったという展開がとても早くてなんとかしなければという思いもあります。

３月のはじめ、頭部をポンプの柄で傷つけ膿んで顔中腫れあがった女の子がいました。良く知っている子なのに、顔の見分けもつかないほど腫れて熱も出していました。この子のために治療費を出したのが始まりでした。マラリアで熱が出ているのに、抗マラリア剤を買えない子、交通事故でバイクにひかれて骨折し折れた骨が外部に露出したまま１か月以上経過している子、両親の死後弟と二人、路上生活をするようになり不衛生のため頭部の皮膚炎がひどく、膿んでしまった子は12歳でした。生まれつき舌が下の歯の内側にくっついたままで、声は出るけど話せない子、この子は切開手術をすればそんなに難しくなく話せるだろうとのこと。ただし、体中の筋肉が萎縮しているので、そのための服薬治療にお金がかかるとのこと。一か月に渡るマグネシウム剤投与を手術の前にするということでした。父親が亡くなった後に生まれた子で母親は他のこども４人とこの子を育てるのに一生懸命だけれど、自身も聴覚に障害があり、再婚したくないし助けて欲しいと言われました。

そのほかにもマラリア、下痢、発熱、足の不自由な子、などなど。薬代、手術代、受診料、マッサージ代保険のないここでは、このような現金の支払いは貧しい家庭では不可能なこともよくあります。子どもたちは黙って我慢をしています。日本の皆様のおかげで元気になれた子、回復の兆しの見えた子どもたちと感謝の言葉を送

ります。

きずな援助金報告書

2019 年に頂いた　350,000 円（2,900€）
の残金訳 1,200€ 分です。

子どもたちの栄養補給のため	110,000F
ノート・チョーク・鉛筆・学用品	131,000F
毛糸・ビーズ・のり・はさみ	65,000F
薬代	23,100F
通信費	8,000F
治療費　（こども８名分）　☆	441,000F
合計　778,100F →	約 1200€

ルワンダ　◆ブタレ◆

ルワンダに派遣されて

天使の聖母宣教修道女会　西　本　桂　子

アフリカ中部の小さな国。面積は東京とその周辺５県を合わせたくらいですが、人口は約 1,260 万人で東京の人口よりも 140 万人ほど少ないです。「千の丘の国」と呼ばれ、緑が多く、小鳥のさえずりが年中聞こえる自然豊かな国です。また、赤道に近いにも関わらず、高地のため暑すぎず寒すぎず、一年中過ごしやすい気候です。

ところが、1994 年にジェノサイドが起き、世界的に有名になってしまったという残念な事実があります。そのどん底状態からの経済的な発展、共生のプロセス、特に癒しと和解への努力を見ると、神様の働きを感じさせられます。

コロナに関しては、2020 年３月半ばに初めての感染者が確認され、翌日にはすぐに学校や教会が閉鎖。外出自制から始まって、県外への移動禁止、ロックダウン等、２週間ごとに規制が見直されました。警察の見張りが厳しく、規則を守らない人には容赦なく罰金や投獄が…。そのおかげ（？）で、感染者数はあまり増えず、長い間「優良国」でしたが、オミクロンが入った頃から急増。でもその後のワクチン普及に伴い、現在は収まってきています。総感染者数（累計）13 万２千人、死者 1466 人（2022 年８月現在）。

私がこのルワンダに派遣されて早や７年。会としては、シングルマザーの洋裁教室、学校での教育、病人や貧しい人々の訪問などをしています。私の住むブタレは物乞いをする人がとても多く、私たちの修道院にも毎日のようにやって来ます。農業国で天候に左右される生活はとても厳しく、できる範囲で援助します（特に自立できるように援助）。と同時に、働きたくなくて物乞いをしている人や嘘をつく人もいて、試行錯誤の毎日です。

私は入会して以来今に至るまで、言葉には随分苦労していますが、言葉がわからなくても生きていける、気持ちが通じるという体験は、私にとって神様からの大きなお恵み、よろこびの源となっています。これが私の「聖霊降臨」とも言えます。

今も世界では戦争や争いが絶えません。国や文化、性格や考え方の違いが争いの元になってしまうのは残念です。「違い」が私の視野を広げてくれる、私を豊かにしてくれると気付かせてもらった者として、このことを一人でも多くの人が体験されることを祈っています。

先日８月２日天使の聖母の祝日には、私たちの若い姉妹３人が初誓願を立てました。来月９月８日には修道会創立 100 周年を記念します。

私たちの主は賛美され、愛され、
感謝されますように！

アメリカ　◆フィラデルフィア◆

グローバル・ミッションを目指して

聖マリア修道女会　延　江　由美子

今年の復活祭は、４年ぶりくらいで里帰りしていたアメリカの修道院で姉妹とともに過ごすことができました。アメリカについてほどなくして、ケタンジ・ブラウン・ジャクソン女史が黒人女性として初めての連邦最高裁判事に指名されるという実に喜ばしい出来事がありましたが、それ以外は、現地から報道されるウクライナの惨たらしい状況やエスカレートする一方の銃暴力など、暗いニュースばかり。聖金曜日の十字架の道行きには銃暴力をテーマとして取り上げ、犠牲者の方達を悼みながら行われました。2020 年５月に起きた黒人のジョージ・フロイドさんが白人警官に殺された事件は記憶に新しいところですが、レイシズムも非常に身近で切実な問題で修道者の間でも頻繁に話題に上っていました。MMS の PR 担当者は 20 代半ばのアフリカ系アメリカ人の男性。常日頃経験している理不尽なことを彼から直接聞いた時、この現実がもっとずっとリアルなこととして強烈に胸に迫ってきたのでした。

また、去年のクリスマスに日本で出版された、インド北東部を題材にした私たちの写真集『いのち綾なす』にまつわる苦労話や、この本が私たちの目指している「グローバル・ミッション」とどう結びついているか、など深く分かち合うことができたのは大きなお恵みでした。こうして実際に来て、同じ空気（日本ともインドとも湿度が全然違う！）を吸って、会って話して、一緒に食事することでわかること、感じることがどれだけ貴重なことか。何十回の zoom も及ばない気がします。呼んでくれた姉妹たちに感謝の気持ちで一杯です。

グアテマラ　◆コロンバ◆

２年ぶりに復活したお祭り

ベリス・メルセス宣教修道女会　眞　神　シ　ゲ

ロス・アンヘレス教区のお祭りが、７月 31 日、日曜日から始まりました。私にとっては初めてのお祭りでした。教区の方達も、２年ぶりのお祭りということで、盛り上がっていましたが、やはり、感染が広まっている為、子供たちの参加が少ないと言っていました。又、例年は、５日間のお祭りですが、今年は、短縮されて３日間だけとのことでした。月曜日には、朝６時に聖堂の玄関が開けられて、マリア様を讃えるお祈りが始められました。マリアッチもやってきて、マリア讃歌の全てを奏でていました。美し

教会の中に飾られたマリア様

い音色が広がりました。夕方には、マリア様の神輿が教会の前の広場だけですが、周りました。本来なら、教区中を練り歩くそうです。

チャド　◆ライ◆

婦人たちの為の識字教育

シュファイユの幼きイエズス修道会　有　薗　順　子

ライ市にドバマニ村とジョム村に合計６グループがあります。各グループの人数は異なりますが、７～15名です。ライは米の生産地です。農作業のカレンダーに合わせて始まり、雨が降ると勉強が終わります。５月21日には試験あり、初級クラスの１と２は10名の婦人方が真剣にノートに向かっていました。中級のクラス７名が年度末試験を受けました。クリスチン先生とマルタン先生の名簿には25名ですが、最後まで続けるのは大変なようです。ご婦人方から感謝している事をくれぐれも伝えてくださいとの事です。

こんにちは！　お久しぶりです!!

事務局訪問の宣教者

７月１日 ―――――――――――――― チャド

シュファイユの幼きイエズス修道会

Sr. 平　静代

神様、本当にありがとう６年ぶりに事務局を訪問、事務局での会話に世界で働く宣教者の方々と心が繋がれる。コロナの渦まだまだ続くのでしょうか？この苦しい試練も神様にお捧げです。本当にすべてはお恵みです。また“きずな”に結ばれて祈りのうちに‼

８月５日 ―――――――――――――― ドイツ

聖パウロ女子修道会

Sr. 比護　キクエ

コロナで帰国出来ず、４年ぶりに事務局を訪問させていただきました。この小さな事

務所から、世界の各地の宣教師や宣教女が沢山の支援やお祈り、勇気を頂いているということに心から感謝しました。

８月５日 ―――――――――― 東ティモール

聖マリア修道女会

Sr. 荒井祥恵

私たち、聖マリア修道女会の東チモールにおけるミッション開始のために支援をしてくださっている海外宣教者を支援する会の事務局をお訪ねしました。ミッションの状況報告も兼ね、楽しいお喋りの時間を過ごしました。支援をいただいてから２年余りの月日がたっていますが、当初このミッションを、2020 年７月に開始する予定でしたが、パンデミックのために大幅に遅れ、2022 年１月 31 日に、ようやく Dili の Atauro 島に入ることが出来ました。これからもよろしくお願い致します。

ザ・メッセージ（海外短信）

＊チャド

シュファイユの幼きイエズス修道会　松山浩子

きずな９月と 12 月分が届きました。ありがとうございます。チャドには、郵便物が届かないと思っていましたが、奇跡的に届いたので驚いています。コロナで東京にも行けない状態で、誰かと出会える事が本当に有り難いと痛感します。チャドで多くの人に出会い多くの事を学んでいます。神に感謝。いつも心に留めて祈ってくださり、本当にありがとうございます。

早くウクライナの戦争とコロナ感染が終わりますように。お心お体ご大切に。

＊フィリピン

善きサマリア人修道会　影山ひろ

昨年９月９日フィリピンよりいろいろな条件をクリアしてコロナ第６派の最中帰国できました。通算 16 年、フィリピンのバコロドで活動中には「きずな」を初め、美しいカレンダー等お祈りと共にご支援いただき感謝にみたされております。本当にありがとうございました。あちらでの活動中、修道院ごと当地のドムスガラシアに大移動していて何もかも新しいスタートでした。上京し貴会を訪問し、御礼を申し上げたいのが本心なのですが、コロナ禍で自由がきかずこのようなお知らせになりました事お許しくださいませ。心よりの御礼をこめて。

＊イタリア　ローマ

イエスのカリタス修道女会　松山恵美子

「きずな」などを受け取りました。いつもお世話になります。直ぐに回し読み始めました。

＊ドイツ　デュッセルドルフ

イエスのカリタス修道女会　黒崎順子

日本は梅雨になり、またコロナのため長い間心配していましたが、２月からのロシアからのウクライナの攻撃の為に世界中が大変な影響を受けています。日本からの送付が難しくなっているそうですが、先ほど「きずな」などが同じ時に届きました。有難うございました。他の国で働いておられる方々の記事を読ませていただき励まされます。

＊東ティモール　ディリ

聖マリア修道女会　荒井祥恵

支援をいただいてから２年余りの月日がたっています。私達は、当初このミッションを、2020 年７月に開始する予定でしたが、パンデミックのために大幅に遅れ、2022 年１月 31 日に、ようやく Dili の Atauro 島に入ることが出来ました。皆様方、この間色々な形でサポートをくださって本当にありがとうございます。Tetun 語も少しマスターしたようで、今、やっと少しずつ、教育のミッションを島の貧しい人々の中で始めています。

ECHO

◇主の平和、神様の祝福が皆様の上に豊かにありますように　（匿名希望）

◇いつも会報を送っていただきありがとうございます。　（兵庫県神戸市　藤田　ふみ子）

◇世界の時の中でお働きをありがとうございます。We stand before you, Holy Spirit. このお祈りに委ねます。（福岡県福岡市　森　由里）

◇きずなをお送りいただきありがとうございます。私は４月から国の研究機関で仕事を始めました。皆様のご活躍を後方から御支援いたします。　（茨木県牛久市　松田　宏）

◇いつも「きずな」をお送りくださいましてありがとうございます。宣教者としての皆様のお働きに胸を熱くしながら読ませていただいております。　（宮城県仙台市　阿部　圭子）

◇きずな 159 号ありがとうございます。届くのが楽しみです。

（千葉県習志野市　東田　裕子）

◇シスター方の尊い宣教の働きとそれを支えられるスタッフの方々の献身に感動しつつ感謝申し上げます。シスター方を通して多くの方がキリストの愛に触れキリストの平和で満たされますように。

（栃木県那須郡　シトー会那須の聖母修道院）

◇記事を読む度に幼少期、シスター方にお世話になった頃を思い出します。派遣されたシスター達が、神様の護りの内にありますように。

（東京都青梅市　鳥居　孝一）

◇８月に引っ越しをします。長い間ありがとうございました。

（福岡県福岡市　長谷川　千恵）

◇続けられる間は続けたいと思っています。

（福岡県遠賀郡　俵　靖子）

◇それぞれ置かれた場所での活躍に心から神様の恵みを祈り応援致しております。皆様お一人お一人に共有の心で祈りと共に少々ですが、送らせていただきます。

（佐賀県佐賀市　けがれなき聖母の騎士修道女会・幼きイエズス修道院 Sr. 指宿）

◇いつもありがとうございます。お働きに感謝しております。（千葉県松戸市　平松　裕子）

◇皆様によろしくお伝えください。

（東京都多摩市　白石　幸子）

◇きずなをいつもありがとうございます。

（東京都多摩市　井上　信一）

◇応援しています。

（神奈川県横浜市　江澤　健二）

日本カトリック海外宣教者を支援する会の活動 40 周年に寄せて

顧問司教　マリオ 山野内 倫昭

「天の国は、からし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」

（マタイ 13.31-32）。

40 周年、おめでとうございます。

考えてみますと、キリスト教徒の数が人口の 1 %にも満たない宣教国・日本から、世界の隅々にまで少なからざる数の宣教者が派遣され、長年に渡って、慣れない土地で、言語の違い、文化や習慣の違いなど、様々な困難の壁を辛抱強く乗り越えながら、援けを求める人々のために献身してこられたことは奇跡と言ってもいいほどのこと、私は、まず、そうした宣教者の皆様のこれまでのご献身に深い敬意を申し上げると共に、皆様のことを大きな誇りと感じています。

そして、それに加えて、そのような宣教師が派遣されていることを知って、少しでもお力になりたい、支援をしたいと考えられた心の温かい多くの方々がいてくださって、40 年前の 1982 年、日本カトリック移住協議会理事長・石神忠真郎司教様の呼びかけで「日本カトリック海外宣教者を支える会」が誕生したことは、宣教師の方々にとって、どれほど心励まされることであったか、想像に難くありません。そして、イエスが話してくださった「からし種のたとえ」を思い出さずにはいられません。40 周年を迎えた今、私たちはこの 40 年の歩みを照らし導いてくださった聖霊の恵みに心から感謝するとともに、宣教師の方々は派遣されたその地で、会員の皆さまはそれぞれの場所で、今後、一層、小さなからし種の一粒となって、神の国の実現のために手を携えて歩んでいきたいとの願いを更に強くいたします。

これからも、道は続いてゆきます。それぞれが神によって蒔かれた一粒のからし種であることを心に秘め、主のみ旨に適うからし種となれますよう、私たちの歩みをゆっくりであっても着実に進めてまいりましょう。

「日本カトリック海外宣教者を支援する会」の 40 周年を記念して

運営委員　マリア 日高 和子（聖心侍女修道会）

今年、「日本カトリック海外宣教者を支援する会」が発足して 40 周年を迎えるにあたって、わたしは、感慨深い思いを抱いています。何故なら、丁度 40 年前の 1982 年 3 月に、私はブラジルに派遣されましたが、同年の 9 月が会の発足で、「日本カトリック海外宣教者を支援する会」は、31 年間のわたしのブラジル宣教にずっと寄り添って下さった大切な存在と言えるでしょう。

日本への一時帰国の折には、一番初めに行きたいところが「日本カトリック海外宣教者を支援する会」でした。発足当時は梶川神父様初め事務局の皆さまは、心から温かく迎え、現地での様子を興味深く聞いて下さったこと、その笑顔が今でも思い出されます。

わたしを含め、ブラジルの貧しい地域に派遣された宣教者の多くは、プロジェクトを申請して、寛大な援助を受けたことでしょう。それにより、現地の人々がどんなに助けられたか、感

謝しかありません。事務局の皆様、運営委員の皆様、特に募金して下さる寛大な方々、その他にも、毎回、「きずな」の校正に関わる方々や、それを現地に送る配送に携わるボランティアの方々にも感謝です。

定期的に送られてくる「きずな」や、クリスマスカード、日本のカレンダーなどから、現地の宣教者は働く力を得られ、日本の教会から派遣されていることを感じることが出来ました。

現在は、現地の活動も海外の宣教者の皆様の高齢化で間接的なものになりつつあるようです。又、宣教者によるこれまでの現地の自立支援活動への取り組みが実りを結んで来ているのでしょうか、以前とは異なった状況になって来ているようです。

現在、わたしは、ご縁があって「カトリック海外宣教者を支援する会」の運営委員として、これまで「日本海外宣教者を支援する会」から受けた支援を、“支援する”側の立場に立って、宣教者の方々を支えることが出来るのは大きな喜びです。

日本でも海外からの、移動・移住者の数が年々増えています。日本のカトリック教会も、その方々が多文化共生を目指す日本の教会、属する小教区に教会の一員として受け入れられるよう、そして、その方々と一緒の教会共同体をどのように作っていくのが良いのか、今、その方法が模索されているようです。

その反面、海外に出向く日本からの宣教者の数は減っています。この現状を見ながら、「日本カトリック海外宣教者を支援する会」がこれから、どのように歩んで行くのが良いのか、将来に向かっての識別が迫られているかもしれません。

最後に、梶川神父様初め、今は天国に移られた全ての人々、特に宣教の地で亡くなった、あの懐かしい宣教者の方々にも思いを馳せ、今年、亡くなられた運営委員の後藤美佐子さん、長井甫さんのご冥福も併せてお祈り申し上げます。

全ての善意の人々に神様の豊かな祝福がありますように！

運営委員　桐野　香（マリアの宣教者フランシスコ修道会）

「きずな」の刊行も早 160 号、40 周年を迎えて、感慨深いものを感じます。

私もモーリシャスのミッションから戻ってきて何年になるのかしらとあらためて数えてみると、早 17 年、当時を振り返ってみることもなく過ぎてしまったような気がしています。「きずな」を読むのが楽しみだったこと、それぞれ頑張っている様子に力づけられ、そして、困ったときに援助していただき、どんなにか助かり、ありがたく思ったこと等が懐かしく思い出されます。多くの方々が会員として、あるいは委員として会を通して海外で働く私たち宣教者を助けてくれていたのだということを改めて確認した次第です。今、こうして自分がこの会の委員という立場になってみて、たくさんの方々の支えがあってミッションに励んでこられたことがよくわかります。宣教者の方々がミッションの地で思いがけない出来事、困難な状況、無力感、そして現在は経験したことのないコロナ感染のパンデミックという状況に振り回されて、思うように宣教活動ができないはがゆさを感じながらの毎日を想像せざるを得ません。日本も今第 7 波、身近な方々の感染を耳にすることが多くなり、危機感を感じてしまいます。私たちも本来ならもっと何かできることがあるはずですのに、この状況の中ではやはり行動が制限されざるを得ません。会の活動にも影響してしまい、残念なこともありますが、でも宣教者の方々が頑張っ

ていらっしゃることを思いながらこれからもできることで協力していけたらと思っています。

「きずな」40 周年を記念して

運営委員　延江 由美子（メディカル・ミッション・シスターズ）

「きずな」40 周年、おめでとうございます。これまで日本での活動がなかった私ども Medical Mission Sisters ですが、2019 年に「日本カトリック海外宣教者を支援する会」の運営委員に加えていただきましたのは実に光栄なことで、感謝しております。初代会長はマリア会の梶川神父様だったと知り、ここでもまた不思議なご縁を感じました。というのも、父は暁星学園で長年教師として勤め、私自身マリア会のシスター方には幼い頃からお世話になっているからです。

力を尽くし心を尽くして世界各地で奉仕なさっている宣教師の方々からのお便りを拝読するにつけ頭が下がります。そして、日本の皆様の素晴らしいご支援に身の引き締まる思いがいたします。

世界中いたるところで、つながりを分断し、いのちを破壊する行為が凄まじい勢いで広がっている今だからこそ、ささやかながらも私たち一人ひとりの祈りと行動が大事なのだと感じます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「設立 40 周年　創刊 160 号」によせて

運営委員　諏訪 なほみ（前きずな編集担当者）

暑さで何もかも溶けてしまいそうな今年の夏、私達、海外宣教者を支援する会は大きな節目を迎えました。故梶川神父様はじめ強い意志を持った先人、先輩の方々によって当会が設立されてから 40 年、その機関誌として『きずな』が創刊されて 160 号に達した年となりました。編集作業をお手伝いくださった方と共に、あれこれ振り返りますと、深い感慨となつかしさを覚えます。

私が実質的にきずな編集を担当したのは 82 号からで、故八巻信生氏から引き継いで 150 号の発行まで、世界各国に派遣されている方々の要望や思いを、何とかわかりやすく皆様にお伝えしなければ、との思いでまいりました。その頃、派遣されている宣教者（司祭、ブラザー、シスター、信徒）が 350 名を超えていて、海外から毎月送られてくる援助申請書やお便りの数も多かった時期でした。ですから 3 か月ごとに開かれる運営委員会では、それぞれの申請書についての内容の検討には時間がかかりましたし、お便り欄に掲載するお便りの整理も大変でした。ほとんど毎月のように報告書として送ってくださる方々、複数枚の写真と共に、長文をたびたびお寄せくださる方々のお顔も、なつかしく脳裏によみがえります。

アフリカや南米の国名、地名を確認するために地図帳も買いました。今はインターネットで調べられますが。行ったことはなくても私なりの世界地図が頭に広がります。

それにしても、体調を崩された宣教者が一時帰国された後、心身ともに回復されて再び任地に戻られたことを耳にするたび、安堵と共に深い尊敬の念に打たれます。すでに帰天なさった方々が、きっとこれからもずっと、私たちの活動を見守ってくださっていると信じております。

この度のロシアの侵攻によってどれだけの人が傷つき、世界中の人々が困難に直面しているかわかりません。今後、アフリカ諸国からの食糧に関する援助申請が増えるかもしれません。今しばらくは対面での運営委員会は控えなければなりませんが、これからも情報交換をして、意義のある援助活動ができますよう心から願っております。

運営委員　波多野　光男・真理子

数年前から世界に脅威を与え続けているコロナ、今も激しく続いているロシアによるウクライナ侵攻等々思いもかけない事が続き、海外で働いておられる宣教者の皆様は、今までにも増して困難な日々を送っていらっしゃるのでしょう。それでも福音を伝えるために働き続けておられる皆様には、心から敬意を抱いています。またこの支援する会の活動が長く続いているのは、活動を支え大切な寄付を寄せ続けて下さる会員の皆様のお陰と感謝しています。

豊かに見える日本でも困難な生活を強いられている人達の数は増えている様子で、そんなニュースに触れる度に胸が痛みます。私たちの属する徳田教会（東京、練馬区）では、今『ぶどうの木 とくでん』と言う活動を始めています。「必要とする方に食糧を」との趣旨で　今までに二回の配布を行いました。一回目に見えた方は数人でしたが、前回七月には二十名を越える方々がいらしたとのことです。私は、まだ直接の参加は出来ていないのですが、手間のかかる活動準備や配布を引き受けて下さっているメンバーには本当に感謝しています。

暮らしていくこと、それは日々の困難を一つ一つ乗り越えていくこと、互いを思いやり助け合いながら。海外で働かれる宣教者の皆様に心を合わせて私達も精一杯一日一日を過ごしていきたいと思います。

運営委員　後藤 由美子

「きずな」40 周年おめでとうございます。

2017 年春から「海外宣教者を支援する会」のボランティアをさせて頂いて以来、海外でご活躍なさっています宣教者の皆様に基本的に月 1 回ドンボスコ社様よりご寄付頂いています「カトリック生活」と沢山の方々から頂きます「カトリック新聞」と雑誌など、そして他の委員さんと 3 ヶ月 1 回「きずな」を送らせて頂いています。

イタリア、フランス、ブラジル、韓国などなど、国名だけを聞けば旅行で行きたい所ばかりです。しかし、宣教者の方々は主要都市から何時間も車に揺られ奥へ奥へと入り、病院もなく、私たちが当たり前の様に使っている mail もいつでも思う様に送る事が出来ない環境の中で生活している現地の方々に寄り添い支えて下さっています。

思いがけないコロナの影響で移動が難しくなりましたが、以前は日本に一時帰国された宣教者の方々が事務所にお寄り下さり、私も神父様、数名のシスターにお会いして貴重なお話を伺わせて頂いた事もありました。驚く程、溌剌となさり現地での大変な宣教を苦にされず楽しんでいらっしゃる様な印象を受けました。また時々、事務所に「雑誌を楽しみに読ませて頂いています」というお手紙を頂き、大変励みになり嬉しく読ませて頂いております。

海外郵便は規制が厳しくなり日本郵便からでは配達不可となる国もある為、他の業者さんの

船便にかえて送らせて頂いております。大幅な遅延になる事もあり、届くまでに何ヶ月もかかっている様ですが、それでも無事に届いて宣教者の皆様に喜んで頂けます様に、今後もお手伝いをさせて頂きたいと思っております。

創立 40 周年に寄せて

運営委員　パウロ 伊藤 厚志

きずな創立 40 周年おめでとうございます。

私と「日本カトリック海外宣教者を支援する会」との関わりについては、２年半前の 150 号発行の際に書かせていただきましたので、その後のことについて書かせていただきます。担当司教、会長も交代して現体制になり、運営委員も引退や帰天のため多くの方が交代しましたが、発足時、梶川神父が提唱した理念は、今も継承され続けて多くの方々のご協力の元、宣教者の支援を続けています。この３～４年は、世界的なコロナウィルス蔓延による行動制限によって、支援の依頼も減少しています。発生当初は感染防止のため中止したこともありましたが、環境が整備され、辛うじて運営委員会の開催やお話を聞く会はリモートで開催となっています。数年前から若者が物欲は満たされ、心の満足度を求める傾向にあると感じています。行動が自由になった時には、多くの若い方々に海外支援をアピールして、若者を中心に支援の輪が広がることを願っています。

「きずな」40 周年を迎えて

運営委員　中村 文子

「きずな」がこの 160 号で 40 周年を迎える…季刊なのだから、もちろんそうなのですが、やはりその数字が持つ意味の大きさには、改めて胸を打たれるものがあります。この 40 年という年月、「日本カトリック海外宣教者を支援する会」に携わり、活動を継続されてきた先輩方のご苦労は、私のように加えて頂いてからまだ日も浅い者には想像もつかないほど大変なものだったのではないかと思います。そして世界中に派遣され、いかに困難な地であっても信念をもって宣教に従事されている宣教者の方々、その方々の思いが「きずな」という小冊子から尽きることなくあふれ出ているように感じます。

今、世界は数年前とは全く違う場所に変化してしまいました。コロナ禍が始まった時、私はこれから世の中は大きく変わるだろうと思いましたが、そんな思いなどロシアによるウクライナ侵略戦争というあまりに理不尽で残酷な現実に完全に踏みにじられ、吹き飛ばされてしまいました。今この瞬間にもウクライナの地では人々が（ロシアの兵士も含めて）命を落としていると思うと、どうしようもない無力感に囚われてしまいます。そして良くも悪しくも狭くなった今の世界では、たとえどこに住んでいようと、この戦争は「対岸の火事」ではなくなっています。経済の悪化、食糧事情の悪化はまず弱い人々から襲っていきます。

最近の「きずな」からもコロナ禍で打撃を受けた宣教地の様子がうかがえますが、戦争はさらにそれに輪をかけた状況をもたらすのではないかと懸念されます。

けれども「きずな」にメッセージを送ってくださる宣教者の方々の言葉はいつも前向きで、

私たちに「希望は常にある」「神様は私たちと共におられる」ということを教えてくれます。支援する会の私たちの方も、宣教者の方々に助けられているのだ、と深く感じます。世界各地に広がっている宣教の輪が「きずな」を通して繋がっていることを実感できるのです。宣教者の方々、私たちの活動を支援し、「きずな」を読んでくださっている全ての方々に心より感謝いたします。「きずな」を楽しみにしてくださっている宣教者の方々のために、私も微力ながら少しでもお手伝いしていければと、心新たに思っております。皆様、どうぞこれからもよろしくお願いいたします。神様のみ恵みと慈しみが皆様とともにありますように。

「きずな発送ボランティア」について

運営委員　島上 麻子

会との関係は、両親が運営委員をさせていただいていたので、父が他界した後、私も参加いたしました。

この度、長い間続いていた季刊誌「きずな」のボランティアによる発送作業を終了し、今後は業者に移行することになりました。新型コロナウイルスにより、この３年間、集まって作業をすることがなかなか難しく、今後も終息が全く見えない状況の中での判断でした。ボランティアの皆様からも、「大変残念！」というコメントが届いております。

作業の場を提供してくださっていたマリアの宣教者フランシスコ修道会と、今までご協力くださいました大勢のボランティアの皆様に、心より御礼を申し上げます。

最後の作業となりました６月２日に撮影。
この日は窓を全開にして、少人数で 2,860 件の発送作業をいたしました。

『40 周年を振り返って』

運営委員　山田 真知子（事務局長）

その始まりの記録 1982 年日本カトリック移住協議会理事長・石上忠真郎司教が「海外日本人宣教者を支援する会」の結成を呼びかけ、同年９月１日に開かれた初会合にて、移住協議会専務理事・梶川宏司祭（マリア会）から乞われて移住協議会理事・服部比左治氏（外務省参与・大使）が会長に選出された。カトリック新聞９月 19 日号に会の発足を掲載。広報を開始して 21 日「海外宣教者の話を聞く会」をイグナチオ教会かつらぎ会館ホールで開き、マルゴット神父、修道女２人から宣教地の実情を聞いた。11 月 29 日「きずな」創刊号を発行、全国司教会議に提示され今日に至る。

このような道のりを経て今も地道に続く会の事務を諸先輩方から引き継いでいることは光栄であり、改めて身の引き締まる思いがしました。これからも会員やこれから会員になって下さる人々と共に海外宣教者方を支援するお手伝いを続けて行けたらと有難く思っております。

連載「海外宣教」

船が出てゆく。どこにたどり着くのか。それはわからない

(Sergio Endrigo　セルジオ・エンドリゴ：イタリア)

共通の家に共に暮らしている意識を持つように呼びかけます

マリオ　山野内 倫 昭　さいたま教区司教

最近、久しぶりに YouTube でこのイタリア語の歌を聴きました。その題名は「ノアの箱舟」でした。私の記憶の中にこの歌がインプットされたのはまだ 15 歳のとき、中学２年のはじめ、夏休みの帰省からコルドバにあるサレジオ小神学校に戻った時のことでした。一度聴いただけで、そのメロデーと歌詞が描いているイメージが、自分の中に永く刻まれました。１９７１年１月の南半球で、とても暑い日でした。日本のように蒸し暑くはなかったのですが。学校へ戻った翌日、小神学校の小さなクラスで、「ノアの箱舟」の歌がみんなを喜ばせました。音楽の先生である一人のサレジオ司祭が、短いプレゼンテーションをしました。創世記の６・1- ９にノアの箱舟の物語があることを知らない人はいないでしょうと言ってくださいました。神がある日ノアに現れて、数ヶ月後に住んでいる所には想像も出来ない大きな洪水が襲ってくるので人間も動物の入れる大きな船を作るようにと、そして具体的にどのような船を作れば良いか指示していた事も先生が説明してくださいました。最後に一番大事なことは、ノアは神を信じ、いくら周りの人たちから無視され、また笑われたりされても、神からの指示に従って真剣に、息子たちだけと箱舟の制作に取り組み、神の助けによって箱舟を造ることができました。とても簡単に見えますが、そうでなかったというコメントが良く中学生で或る私たちの記憶に残りました。

司教になったばかりで、「難民移住移動者委員会」のメンバーとして一つの記事を書いた時、この歌を思い出しました。しかし、その時はその背景、つまり作者が伝えようとした、もっと奥にあるメッセージを分かち合わないで私の自己紹介を中心にして書きました。ですからこれからの短いコメントはその続きだと考えても良いと思います　(2019 年 AOS 船員の日メッセージ)。

サンレモフェティバル（イタリア、1970 年）

「ノアの箱舟」の歌のメッセージについてコメントする前に、この歌がどのように公になったかを思い出したいです。その作者エンドリゴ（1933 ～ 2005）はクロアチアの北にある、人口約６万人の観光の町である港町プーラで生まれました。エンドリゴは、有名なサンレモのフェスティバルで３度優勝したイヴァ・ザニッキ（Iva Zanicchi1940-）と同じ舞台で歌いました（1970）、彼女もこの歌を何度も歌い多くの人が歌うようになりました。

この歌の歌詞についてコメントをします。みなさんご存知のように、多くの歌は、その時の社会、政治、宗教の問題を表し、人々を目覚めさせます。あるいは民として同じ意識を持つよう提案します。独裁政治の報復を恐れて人々が公に表せないこと、貧しい人や移民に対する助け合いを、歌を通してもっと自由に表し、人々の希望にピッタリとチャンネルを合わせます。旧約聖書の中で悪い政治を行うイスラエルの王たち、神のプロジェクトから全面的に離れた政治を行なっていた王たちは、預言者たちに非難されていたのと同じです。しかしそれよりも現

代の政治家にとって、このような歌詞の方が大きな打撃になります。

人類の未来のために、共に暮らせる地球をいま守るように

「ノアの箱舟」の歌は、エコロジー的意識を目覚めさせる必要があると語っています。しかし、緑の自然だけではなく、自然との調和的関係、つまり全ての生き物と、特に人間の自然との調和的関係を言っています。作者は分かりやすく、このモダンなテーマ、すなわち、世界レベルで初期の段階にあるエコロジーに向き合っています。この大きな課題に関して、国々のリーダーたちはやっと意識を持ち始めつつあります。人類がこの地球に住み続けたいのであれば、急いで、真剣に自然を守らなければなりません。

エンドリゴは 50 年前に、このエコロジーのテーマに触れていることが私たちの注意をひきます。エコロジストは、この地球環境が劣化していることを強調しています。対して、エンドリゴは、そうではなく、人間が自然と健康的で調和のとれた生き方をすることに人類の真の未来があり、それを可能にする唯一の道である、と歌っています。

「ノアの箱舟」の歌を通して、私たちは、開かれた姿勢、アッシジのフランシスコが語った宇宙的兄弟愛の姿勢を持つように招かれています。それは彼の「被造物の歌」の中に描かれていますし、教皇フランシスコご自身が 2015 年 5 月 24 日に発表された回勅「ラウダート・シ」にもあります。終わりに二つの祈りがあり、そこにまとめて表現されています。

全ての良い歌には、短く、簡単に覚えられる繰り返しの部分があります。家庭的なイメージがそこにあればもっと良いでしょう。作者はどのように家庭のイメージを取り入れたかと言えば、箱舟の側に、犬と猫、そして二人の人間を名前なしに、「あなたと私」と言っているだけ。暑い時期に、遠くから来るツバメの群も。港町であるプーラには、観光客だけでなくツバメも巣を作るために来ていたようです。

ですから、エンドリゴさんにとっては、船が出発する時の光景は、歌を通して表すほど、自分の中に深く刻まれたのでしょう。プーラを離れる、イタリアに移住する多くの人のように、将来を探しながら出発しました。子どもたちを未来に向かって育てるために、カモメやツバメも移動します。

地球、この複雑な一致についての意識を持ちましょう。人間以外の全ての被造物も含めて、生きている人のみんなの家は、創造主である神の業です。私たちはその手入れを任されています。しっかりとしたビジョンを持って、すべての生き物の共通の家にしなければならないのです（創世記 1.28）。

出発します、船は出てゆきます	*Partirà　la nave partirà*
どこにたどりつくのか、それはわかりません	*Dove arriveràquesto non si sa*
ノアの箱舟のようになり、	*Sarà come l'arca di noè*
犬、猫、あなたと私	*Il cane il gatto io e te*

新入会員（敬称略）

個人会員　９名＋匿名３名

服部 栄子（東京都品川区）　トイケ イズミ（東京都中央区）　松岡 詔子（神奈川県横浜市）

松本 楚子（東京都稲城市）　高山 協子（東京都西東京市）　今枝 直子（……）

山 本　強（広島県広島市）　桜井 尚明（熊本県熊本市）　小 川　満（富山県富山市）

事務局より

◎この記事を書いている時はコロナ第７派と言われ、皆きちんとマスクを着け、注射も打っているのに広がっていくのはなぜだろう？と首をかしげたくなります。周りの知り合いにまで広まってきていて、どうなることでしょう。ただ神様に祈ることしか出来ません。

◎それでも事務局には海外からの帰国者が少しずつ訪問してくださるようになって参りました。これは嬉しい限りです。何年待ったことでしょう。

◎援助申請も漸く頂くようになりました。ゆっくりと戻っていければと思います。

◎今年は「日本カトリック海外宣教者を支援する会」が始まって 40 周年を迎えることになります。これはひとえにご寄付くださる皆さまのおかげと有難く受け止めております。「きずな」160 号は記念号になります。運営委員一同すべての皆様に感謝申し上げます。

◎海外で引き続き宣教活動を続けている皆様にも感謝を伝えたいです。皆さまの原稿の一言一言が本当に宝物となって響いてきます。ありがとうございます。

◎ 11 月 19 日土曜日 AM10：00 より東京大司教区　菊池功大司教様のお話会を予定しております。Zoom にてご参加されたい方は事務局にメールをお送りください。可能な限りご招待を送ります。題名「皆でともに歩む（シノドス）出向いて教会であるために」

◎引き続き会員の皆様にはご家庭で眠っています、切手やはがきをお送りください。通信費として大切に使用させていただきます。これからも皆様のご協力をお願い申し上げます。

◎宣教者の皆様で名簿が届いていない所がございましたらお知らせください。

発行：日本カトリック海外宣教者を支援する会

〒106－0032　東京都港区六本木４－２－39
Tel. 03-5770-8753　Fax. 03-5770-8754
e-mail　kaigai-senkyo@cronos.ocn.ne.jp　URL　http://www.kaigai-senkyo.jp

・銀行振替口座　みずほ銀行高田馬場支店　普通　２０８４１１２
日本カトリック海外宣教者を支援する会

・郵便振替口座　００１４０－５－６７８８１　海外宣教者を支援する会